パリ・モードあれこれ

神田　美年子

エトワールの広場とコンコルドの広場を一直線に結ぶシャンゼリゼーの両側には，マロニエの街路樹を前景にして，4，5階建のビルが整然と軒を並べて建っている。瀟洒で，気品のあるたたずまいである。その並木道をパリ人は黙って足早に歩いていくのである。両側のビルは銀行や航空会社のオフィス，香水，洋品雑貨，婦人服，靴などの店舗であるが，その間にレストランもあって，店の前のテラスはオープンのカフェーになっていて，色とりどりの日除傘が美しく並んでいる下で，パリ人は一杯のコーヒーを飲みながら，何時間も黙って，道行く人を眺めているのである。よくも退屈しないことだと思われるが，何か魅力があるのかもしれない。わたくしも一度はその気分を味わってみたいと思い，パリ祭の前夜の8時頃ホテルを出た。そして凱旋門の最も近くにあるカフェーのテラスの一隅に陣取ったのである。パリ祭の前夜であれば，町にはお祭気分が漂っていて，華やかなパレードや踊りがシャンゼリゼーを練り歩くのではないかとも想像していた。それに日本を発つとき，パリにいたことのあるわたくしの友人が，どこかのカフェーで，道行く人を眺めるのも服飾の勉強になるだろうと教えてくれたからでもある。

真夏であるのにパリの夜は涼しくて，ノー・スリーヴの肌に夜風は冷たく，わたしは慌ててコートを羽織った。時が経つにつれて人足は繁くなってきて，仲のよさそうな若い男女が囁き合いながら通って行く。シックな装いをしたブロンドのパリジャンヌ，色彩の華やかなのは観光客であろうか。なかにサリーを纏った婦人も混っている。その服装はバラエティーに富んでいて，まるでショーを見ているようで楽しいけれど，わたしをしびれさせるようなパリ・モードは一向に見られない。むしろ銀座や心斎橋を歩るいている方が，はるかに派手なニュー・ルックを見かけることがある。夜の9時や10時は，パリではまだ宵の口であるから，そのうちにお祭気分も揚ってくるのかも知れないと思い，12時近くまで，それこそたった一杯のコーヒーで頑張ってみたけれど，パレードも通らず，とうとうニュー・モードにもお目にかかれぬままに，パリ祭を明日に控えたシャンゼリゼーの夜は，静かに更けて行くのであった。

凱旋門も見馴れ，A・FやJ・A・Lのオフィスにも通い馴れたある日，わたしは赤い表紙のパリ案内図を片手に，メトロのフランクリンの駅に降りた。オートクチュールを訪ずねるためである。シャンゼリゼーを横切って，右に曲ったモンテーニュ街に，クリスチャン・ディオールの店を見付けた。50軒ばかりあるパリ・オートクチュールの中で一番豪華な店の構えであると聞いていたが，なるほど世界を風靡した大御所の名残をとどめるにふさわしい，格調高い構えである。入口近くにはブーティック（洋品雑貨部）があって，香水，スカーフ，アクセサリーズ等が並んでいる。商品は極く少数ではあるが，一つ一つが選りすぐられたものであり，オリジナルに富んでいる。洋服は僅か1、2着飾ってあるだけである。少し奥に入ると男子物の売場があって，ネクタイやベルト等の男子物洋品雑貨が並べてある。入口に近い階段を昇ると，ここにもショーケースがあって，黒いビロードの布の上には，高級なブローチやイヤリングが燦然と輝いている。部屋の片隅に帽子が15点ほどとイヴニング・ドレスが2，3着ハングされているだけで，コレクションを控えて，服を小脇に抱えた黒いワンピースのバントウズ（売子）が忙しそうに右往左往しているのが目につく。コレクションはどこで行われるのだろうかと考えながら店を出た。

ディオールの店から少し行ったところにマギー・ロフとギイ・ラロッシュの店があった。ウインドウにはミンクの毛皮が輪にして並べてあったり，2，3点の香水や靴が，置物の側に配置よく飾られてあるだけで，一寸見ただけでは何を売っている店でるあかもわからない。その他ジョルジュ五世街のバレンシャガ，ジバンシー，フランコイス街にあるバルマン，サントノーレにあるカルダン，カスティロの店など次々に探し求めているとすっかり疲れてしまった。ランバンの店の前では，コレクションに発表する作品の写真を撮っていたので，わたしもチャンスとばかりおそるおそるシャッターを切った。

待ちに待ったコレクションを見る日がやって来た。ジョルジュ五世街のジバンシーの店に行くと，店の前にはデザイナーの上田安子さんが待っていて下さった。ほどなくモデルの入江美樹さん母子が来られ，続いて毎日新聞パリ支局の南さんの車で，作家の山崎豊子さんが来られた。ジバンシーはプレスを記事解禁日までシャット・アウトするので，南さんはコレクションを見ることが出来ないのである。わたくしたち5人は，コレクションの行われる二階の会場へ行ったが，まだ誰の姿も見えない。コレクションは午後3時から始まると聞いていたが，3時を15分も過ぎた頃，一人のフランス婦人が犬を連れて現われた。つづいて二人の婦人が入場しただけで，その日の観客は計8人である。世界的なコレクションをたった8人で見るのは光栄に思われたり，その反面勿体なくて，発表者に気の毒な気さえする。そして入場者をあれほど厳しく制限することが不思議にさえ思われた。

3時30分頃，何の前ぶれもなく，突然に黒い毛皮のコートを着たモデルが，「17」と記された白いカードを片手に掲げて現われた。なんとなく頬のこわばるような緊張感を覚える一瞬である。場所が狭いので縫目まではっきり見えるが，何分息もつかせぬ早さで交替するので，ゆっくりと落着いて観賞しているわけにはいかない。オートクチュールの中でも，殊に名声の高いジバンシーの作品には，一つとしてそつがなく，全体の作品には若さとみずみずしさがあふれている。バイヤス裁ちのカクテル・ドレス，ほっそりとして，裾で少しだけ拡がっているイヴニング・ドレスには東洋的なモチーフが織り込まれ，優雅で気品高い。スーツはシンプルで馴染み易く，色や柄を変えることによって，年齢層や用途面を巾広くすることが出来るという，作者の意図が伺える。色はマレンマ・ブラウン，渋いグリーン，黒，紫が基調をなしていて，コートにも，スーツにも皮のベルトが多く使われているのが目立った。コレクション終了後，ジバンシーの兄さんのジャン・クロード氏が入江さんに，「ジバンシーの作品を着てほしい」と所望されたので，入江さんが和服を脱いで紫のシース・ドレスを着られたが，さすがに入江さんだけに立派に着こなされ，クロード氏も満足そうだった。

翌日パトウのコレクションを毎日新聞パリ支局の南さんの案内で見る。昨日に比べて観客は多いが，それでも30人ぐらいであろうか。ここにも大きなセパードを連れた婦人がいる。パトウの作品は，ジバンシーのエレガントさに比べると，ややスポーティで，生活に直結した安易さが感じられる。タートル・ネック風の立襟，切替え線やポケットの雨蓋にかかっている太いステッチ，広い肩巾，二列に並んだ釦，それに中世紀の甲を連想させるような，後頭部をすっぽりかくした布製の帽子などから，わたしは何となくミリタリー調を感じとり，今年のパリ祭に見た，国防色に塗りつぶされた戦車隊のパレードが，ふと眼前をかすめ去った。それでも夜の服になると，一度に春がやって来て，花の匂いが部屋いっぱいに漂うようなムードを感じる。「オートクチュールの服には匂いがある」と誰かがいった言葉はこのようなことを表現しているのであろうか。うっとりと花の香に酔わされているうちにコレクションは終りを告げた。

今年のパリ・オートクチュールのコレクションは，世界的な不況に影響されて，どの店も不況に備えるべく作品を減らして，背水の陣を敷いたと聞いていたが，山崎豊子さんが帰朝後，毎日新聞に「世界的な不況が，パリの高級洋服店を曲り角にたたせ，その曲り角が日本の服飾界に大きな示唆と反省を与える結果になりつつある」と記されていたが，これはわたくしの今度の欧米旅行で，各国の衣生活を実際に見て痛切に感じたことであり，今後学生の指導にあたるについても，大いに考えなければならない問題だと思った。

イタリアのデザイン学校でのレセプション

欧米家政学視察旅行で訪問した学校及び研究所は下記の通りである。

INSTITUTO DI ALIMENTAZION E DI ETOLOGIA	(イタリア)
ACCADEMIA ITALIANA DI COSTUME DI MODA	(イタリア)
WIEN UNIVERSITY	(オーストリヤ)
JOHAN WOLFGANG GOETHE UNIVERSITY	(西ドイツ)
LE CHR. INDUSTRIE EN HUISHOUDSCHOOL OUDEHOORD	(オランダ)

MAYFIELD SHOOL	(イギリス)
OXFORD UNIVERSITY	(イギリス)
LYCEE TECHNIQUE DU VETEMENT	(フランス)
INSTITUT NATIONAL DE LA RECHERCHE MADICALE ET DE LA NUTRITION	(フランス)
PARI UNIVERSITY	(フランス)
KNORR KOCH-STUDIO	(スイス)
KANTNALE BERGOAUERN UND HAUSHALTUNGE SCHULE	(スイス)
MASSACHUSETTS COLLEGE OF ART	(ボストン)
PARSONS SHOOL OF DESIGN	(ニューヨーク)
McCALL CORPORATION	(ニューヨーク)
NORTHWESTERN UNIVERSITY	(シカゴ)
UNIVERSITY OF WISCONSIN	(マディソン)
WOODBURY COLLEGE	(ロスアンゼルス)
THE CHOUINARD ART SCHOOL	(ロスアンゼルス)
UNIVERSITY OF HAWAII	(ハワイ)

(本学助教授—被服学)